

研究

下浦の開發史(中)

——主として中世の展望——

東京都板橋在住(米水津村竹野浦出身)
会員 御手洗 一 而

(6) 佐伯氏の下浦政策

佐伯氏が下浦の整備にとりかかるのは、いつごろからか全く資料がない。しかし、佐伯氏が佐伯湾によって菴園化する十一世紀から十二世紀にかけて、佐伯湾(上浦・中浦)の掌裡は割合に早かったとみらい、原始海人族から海部公に統治され、さらに佐伯是基(是本)に代表される佐伯部氏族の制圧である。そして、私安園田帳に示される、本庄一二〇所、堅田村六〇所の時期には、下浦をも含めて、完全な統治下にあったと思う。

しかし、下浦に対する直接的な政策はどうかである。うかがいし、先づ書いた通り、政治的にも軍略的にも無価値な地域として、放置状態のまま、佐伯氏自身の手による積極的な開發手段はなかったと思われる。

例えば、大友氏が國象の一大勢力であった大神氏の所領に、一族を組み入れて同化をはかっていたことのように、佐伯氏の一族一門から、誰かを下浦に移住させて、直接的に開發するという手段方法である。

これらは全く認められない。

大永年間の榎牟礼合戦の諸郡將名を見て、海岸部で地名を冠しているのは、津井・狩生・松浦ら、ほとんど

が佐伯湾に属し、下浦地帯にその名を見ることは出来ない。また、中世を通じて、佐伯氏の祭祀の伝承や遺産・遺跡は皆無である。だから、佐伯氏にとって、ただ「支配下に組入れる」ぐらいの認識で、当時それほどの地域勢力もなかったと推察される。

そして、十五世紀になって、前項にあげた娘蔵の合戦や、それに続く大内勢の佐伯湾侵入等によって、改めて海岸防備の必要性を再検討する余地が生じたのである。その上、下浦の開發が、海上からの浦給の税・兵力の面でも、軍備擴張や富國の一翼はになえらるとふんだのである。

そこで佐伯氏は、外来者の手による下浦開發を考へ出したのである。あるいは、娘蔵や大内勢侵入の結果、落武者の活躍が自然にそうさせたのかも知れないが、城下所に住む佐伯氏一族一門にとつて、下浦が住みやすい土地でなかったことだけは確かである。

そして私は、御手洗一族が娘蔵で活躍した因縁と、わずかに六十年後に起こった大内氏の佐伯湾侵入の時期が、佐伯氏の下浦開發を考へる契機になったと考へている。

その結果、落人氏族がもっとも懸案の保身について、身の安全を保証され、流着地を安堵されることによつて、その土地の開發に乗り出し、外敵から守るために、充足の整備を急ぐことになる。このことは、佐伯氏にとって、開發と海岸防備という、一石二鳥の政略であり、ひいては、兵力の増強と富國につながる二面性をもつことにならる。そして、身の安全と海岸防備、未開地開發という交換条件が、佐伯氏と落人との利害關係において一致する面白い現象となっている。

以後、各湾のそれぞれが生括園をもつた氏族は、落人

をも含めて、むしろ佐伯氏の保護のもとに、独自の開祭を試みたとみてよく、その施策や方法について、各氏族独自の手段による特色をもつことになる。

(1) 開祭の基本線

前項まで見てきた通り、佐伯氏と下浦との関係は、雄嶽合戦や大内侵攻を契機として、史実に表面化してくる。私見、この時期から榊宗元築城期までの六七十年間が、真の意味の下浦開祭期ではないかと考えている。

そして、蒲江の熊野一党や入津の菊池残党も、身を隠す立場から開祭を奨励される立場に好転する。とくに、官方であつた菊池残党は、南朝北朝合一後、足利幕府の時代にあつて、その辛酸は想像以上であつたと思われ。

しかし、この開花期に、佐伯氏の開祭援助はどうであらうか。例へば「知行を与える」とか、「禄を食む」とか、恩典はなく、「土地だけは安堵するから勝手に食え」という程度であつたと思ふ。この放任主義が、佐伯氏とあまり関係のない、独自の下浦地域を作り出す要因となり、各氏族の特色を生み出す結果となつてゐる。

そして、その特色を生み出すには、一つの基盤が考えられ、下浦開花期の一段落する榊宗元築城期に、御手洗三代信恭が浦方総浦の代官となるまで増長する過程には、初代信秀の施策を無視することは出来ない。

私は、この信秀について、現在の佐伯市と開市の思入である毛利高政との関係を連想するが、信秀と下浦との関係は、あくまでも、伊予衆三島水軍の流儀であることと特筆したい。そして、三島海賊流のやり方が、以後中世下浦の開祭に随所に見られるから、ここでは、基本的な特徴を幾つか書き出しておきたい。

瀬戸内の動乱期を乗り切る、村上水軍や三島水軍の基本的な考え方には、

④ 保身術が上手であること

⑤ 政治的見通しの上で行動すること

⑥ 独立採算制をとること

⑦ 完全な隷属を嫌うこと

などがある。

つまり戦乱時代に、一族の壊滅はもつとも怖れられたことであり、そのためにも、弱者への見通しについて、あるいは幕府方につき、あるいは朝廷方につき、その変化変貌のばげしきは、一つには中央との情報がかつたことにもよるが、行動を常に自由にするため、独立兵団を組織し、共通の敵に対しては団結しながら、相互に不干渉の立場をとつてゐる。もちろん、瀬戸内では、各氏族は島単位でその去就を明らかにしてゐるが、主家に対して、完全な丸抱えを拒否してゐる。この丸抱えによる拘束を避けて、自由自在に行動し得る余地を残すには、自給の原則が必要であり、独立採算制にたがふ。

ついでに、伊予河野守護職には、当時十八船大將と三十二の部将がいたが、これらの部族は、独自の判断で戦乱期を泳ぎ、守護職が完全に彼等を掌握し切れなかつたところから、大友氏のように戦国大名として生き残れなかつたといふことがいふ。

当時の御手洗信秀に、この着想のない訳がない。一族の保身のために、雄嶽の合戦に義理を立て、かといつて、宣仕えによつて佐伯氏と運命を共にすることを避けるため、兄弟を分散してゐる。換言すれば、佐伯氏に対する海岸防備の防人的役割は、一族保身の建前でありながら、

危急の時は、佐伯氏によって見捨てられる危懼はいつもあったと思う。このことは、乃ちに佐伯氏の一族との縁組みから、同化に組み入れられ解消するが、当初、伊予で経験した河野守護職の嫡庶の争いと、流着後、大友氏の氏継流と親世流の争いは、次にくる佐伯氏についても警戒しているはずである。

この歴史的事実は後述するとして、以上の基本編が佐伯氏の放任主義とあいまって、各氏族生活圏の確立のため、他族不干渉の立場をとり、ひいては、米水津・入津・蒲江・名護屋の独自の開墾に任せられることになる。

じじつ、この時代では、各氏族は開墾に手一杯なところが出来てある。しかし、この根本的を思考が底流になって、やがて各支族から各湾それぞれの様式方式のもとに、湾岸の開墾に発展してゆくことになる。

(8) 開墾の手段

外来者へ落人や残党の各個人の文化生活圏が、先住民との同化を果たしながら、佐伯氏との関係の上で、開墾し得る条件と基本的な考え方を考察すると、次はどのようなに具体化したかが問題である。

しかし、開墾の手段といっても、中世の開墾期は、農料や漁業にしろ、その技術をみる資料もなく、また技術を云々する時代ではなかったと思われる。

ただ私は、初期の開墾期は、資源と土地と人口の三つの問題を切り離すことは出来ないと考えている。

先ず、海の幸である海産物や漁獲は、乃ちに毛利高政が奨励した如くいうまでもないが、穀物の面では、田地から荒地・未開地と、手当り次第の開墾が急がれたとみ

たい。その結果が、十六世紀の終りに見る下浦の高帳(竹野浦御手洗文書)では、「田方高一八三石、畠方高三五〇石、屋敷高一六石」という出されてる。

だから、この時期に空地(への住んでいない小浦の意)への進出も始まったと考えられる。狭い土地には、同族の土地割りにも制限があるが、あくまでも他氏族に影響のない湾内での進出志考がみられる。例えば、入津湾の尾浦は、西河内に入った菊池一族の支流と聞き、米水津湾の尾守良・繁・開の飛地もそうであり、これらの飛地の開墾は、落人が身を隠した時代から、開墾に躍動する現象の一端であるかと推察される。そしてこの現象は、佐伯氏による指示よりも、各氏族構想のもとに行われたとみたい。

次に、資源の開墾に人手が要れば、土地を求めるとも人口の増加が原因する。しかし、この人口の増加は、開墾だけでなく、戦乱時代において、兵力の要因になることと考えねばならない。乃ちに、毛利高政が下浦からの人口の流出を防ぐ杖(あて)を出したが、当時佐伯氏にあっては、落武者の外来者は、その点では歓迎すべき現象であったかも知れない。

この兵力の目安について、伊予流に「一兩具足」ということがある。

「一領具足」とは、日本最古の農事書とする「清原記」の中に、「田地志所」と云い、近代一兩具足と云い、侍老人分の領地也。此田畑耕作の夫役の事、上下中分を積る」とある。

伊予における一人前の侍とは、田地一町を領分とする伝統である。もとより下浦の水田は少ないが、同書に、

一町町に對する夫役計積が約三百人とあり、この仕事量
を島也兼業に換算して、兵事における可能動員数の參考
になる。

そこで考へつくことは、人力のフル回転であり、兵農
未分離ということである。武士が専門化するのには、織豊
時代以後とされているが、下浦の開闢時期は、佐伯氏と
の約束通り海岸防衛のため、陸にあっては農夫、海にあ
つて漁夫、合戦には戦士であり武士化する。

このことは、開闢と同時には、海岸防衛における、下浦
の各水軍構成に、中世にあって忘れてならないことであ
る。そして、この一部將三百人動員可能の戦力が、天正
年間、佐伯惟定の感狀(注佐伯文書。号一五七)にみる「數
十艘」の戦力で実証されることになる。

(9) 開闢の一転機

開闢の一転機とは、むしろ開闢期の一段落とした方が
よいかもしれない。その時期は、先に書いた梅牟礼築城
の時代であるが、梅牟礼移転にさいして、下浦も同じく
一時代を画したと思えるから、傍証をあげて少し述べて
みたい。

はじめに、梅牟礼佐伯城が以前の堅田の高城と比定さ
れる佐伯城から移転する時期について、必ずしも確証はな
いが、十六世紀と前後する年代であることは、私見を佐
伯史談に発表した通りであるが、その理由として、大内
来攻による海岸線からの後退や、佐伯氏の相続問題など、
二三の点をあげておいた。

つまり、佐伯惟治の時代、父惟世の存命が問題にされ
た時代であるが、御手洗家三代信恭が、その頃浦方代官
に任命されている。
私日ミカことについて、佐伯領岸防衛の一志の見通

がついたと考へている。見渡しとは、海からの侵入者
に對立し得る、各藩の勢力確認である。

少し余談になるが、信恭の子定信は、佐伯惟治と同年
配で、尾高知で惟治と運命を共にするが、定信は、佐伯
氏の一族から女をとり、同族として容認されたふし
がある。

それはさておき、信恭が浦方の代官として全權をゆた
わられる時、下浦の開闢を見届ける傍証が、「大友與亮
記」に記されている。

その傍証とは、佐伯惟常の蒲江訪問である。惟常は惟
世の孫にあたり、兄惟勝と不仲で、大友氏の意向もあつ
て伊予に逃げていた。この兄弟は、九代佐伯惟世の正室
を相続権をもつ位置にあつたが、相争い、御手洗一族が
もつとも奪取していた、佐伯一族のあつたが、この頃
表面化している。永正(一五〇)の頃である。

そして、この惟常の蒲江訪問は、代官御手洗信恭に對
する、蒲江の御手洗庶流の勧誘にある、と私は推察した
し、しかしこの事例は、蒲江に、熊野一族であれ、御手洗一
族であれ、かなりの勢力があつた証拠ではないかと思
われる。

もちろん蒲江勢は動いている気配はない。伊予河野の
嫡庶争いにこり、大友氏の嫡庶争い(兼職)にこりた御
手洗一族が、佐伯氏の争いに警戒したのはいままでにな
いが、信恭が浦方の代官に榮進する過程には、下浦を完
全に掌握していたとみるのが妥当である。

以上の例から、梅牟礼築城期には、各氏族から發展し
た藩単位の開闢、ひいては勢力圏は、一志の整備は充足
されたと思われなければならない。そして、佐伯氏との開闢

日、下浦を統轄した行政的支配の一端を視ることが出来る。

だから、この開花期が、下浦開墾の過渡期でもあり、下浦完達の汗の時代とも言えよう。

しかし、この勢力拡充整備が、若い佐伯肇治城主に逆作用して、毎年礼闈域に一つながるの皮肉である。

(つづく)

賞書

満州佐伯村おぼえ書 (十二)

第十次昌圖佐伯開拓団小文

會員 矢野 徳 弥

(三) 在滿大分県報國農場の設置

昭和十九年に入り、佐伯開拓団の区域の一角に、在滿大分県報國農場が設置されることになった。

報國農場は、毎年開拓団に派遣され、その指導の下に食糧生産に従事してきたこれまでの勤勞奉仕隊と異なり、深刻化した日本内地の食糧危機に對処して、中央団体も府県が独自に満州に農場を開き、そこに管下の青年男女を送りこんで、直接食糧生産に当らうとするものであった。

そして、大分県報國農場がこの地を送んだのは、直ちに利用でき、かつ成果が充分に期待できる、実証済みの耕地が準備されていたこと、必要に応じて、何時でも

支援の受けられる、同郷の開拓団の域内であつたからである。

報國農場の設置により、佐伯開拓団に對する米穀増産特別班(勤勞奉仕隊)の支援は打ち切りとなり、このあと、開拓団と報國農場は、互いに協力しつつも、独自の道を歩くことになった。

(一) 満州建設勤勞奉仕隊の歩み

在滿大分県報國農場について書く前に、報國農場に至るまでの、満州建設勤勞奉仕隊全般の歩みについて概略触れてみたい。

満州建設勤勞奉仕隊が、始めて送られたのは昭和十四年であるが、始めの頃、その目的は、

「満州國の産業開發、北邊振興、並びに開拓の三大國策の遂行に在り、國家の中堅となるべき青少年に、

勤勞を通じて満州建國の真義を理解せしめる」という、教育的色彩の濃いもので、文部省がこれを主宰し、隊員も学生・生徒や、地方青年の中から選抜され、その派遣先は、主として既存の開拓団であつた。

昭和十五年も、勤勞奉仕隊の派遣は、文部省の主導下に行なわれたが、新しく特設農場の試みがなされ、農林省もこれに側面から協力を行なつた。

この特設農場は、満州拓植公社が北滿五ヶ所に新設し、前期(五、六、七月)、後期(八、九、十月)の二班に分け、二千八百名の青年を派遣して、その勤勞奉仕により、將來の開拓団入植地を準備する作業を行なせられたのである。

昭和十六年に入ると、文部省の外に、農林省、振興省が独自に勤勞奉仕隊の派遣をはじめた。その内訳は次のようである。

文部省派遣 四千七百名

○ 満州建設勤勞奉仕隊開拓生産隊(以下要書の名録を略す)